SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

B-1
地域博物館における来館者の利用状況と意向に関する研究 その3：八戸市水産科学館を事例として(建築計画)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 宏之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8563

地域博物館における来館者の利用状況と意向に関する研究　その３

八戸市水産科学館を事例として

正会員　○石川宏之*1

５．建築計画　　２．各種建物・地域施設
科学館　　来館者　　利用圏域
八戸市　　リピーター　　観覧行動

１．はじめに

１．１　研究の背景と目的

近年、博物館は多くの人々に生涯学習の場として活かされ､地域住民のアイデンティティの形成を図っている。また､地域社会の課題に対処した博物館活動が求められ、衰退した地域を活性化させる集客施設としての役割も期待されている。これまでに日本各地で地域振興のために巨大なハコモノを建設して出来た多くの博物館は、運営のノウハウを持った人材不足と予算不足により貧弱なコレクションや活動に陥り、巨大な建物の維持管理費がかさむ無駄な公共事業として批判されてきた。しかし、本来の博物館は、地域にある自然や文化・産業などの様々な遺産を生かし、次の世代に伝えていくために調査研究・収集保存・展示教育から成る一連の諸活動を行う機関である。[1)]

これまでに博物館の利用状況に関する既往研究として博物館活動と利用状況に基づいて類型化を試みた研究[2)]や展示・解説による観覧行為の影響からみた展示計画に関する研究[3)]等があげられる。また石川は、博物館と美術館における来館者の利用状況[4) 5)]を捉えてきたが、科学館における来館者の利用状況に関する研究を行っていない。

本研究は、科学館を訪れる来館者の利用状況と意向を捉え、リピーターを増やすための条件や課題を明らかにし、博物館活動を活性化させるための手がかりを得ることを目的とする。

１．２　研究方法

研究方法として、先ず科学館における来館者の属性を把握し、来館者の要望及び立ち寄り状況を把握する。次に来館者の観覧行動と展示手法との関係を捉え、リピーターを増やすための条件を考察する。調査対象は八戸市水産科学館[(1)]（以下、科学館と略す）とする。選定理由は八戸市地域の自然や水産業をテーマにした観光拠点としての役割を担い、地元住民が集う地域博物館だからである。調査手法として、先ず八戸市水産科学館の職員に対し聴き取りを行い、次にそこの来館者に対して 2007 年 11 月 1～11 日の期間にアンケート[(2)]を、2007 年 12 月 2～9 日の期間に３階展示室内[(3)]における追跡調査を実施した。その概要は表１と表２の通りである。

表１　アンケート調査の回答者の属性（単位：人）

	若年層 (29 歳以下)	中年層 (30～59 歳)	高年層 (60 歳以上)	合計	割合
市内	35	83	25	143	50%
市外	12	40	13	65	23%
県外	9	61	9	79	27%
合計	56	184	47	287	100%
割合	19%	64%	17%	100%	

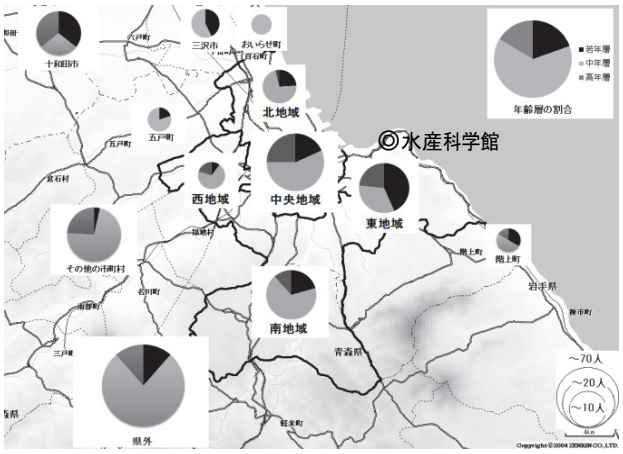


図１　科学館における来館者の利用圏域

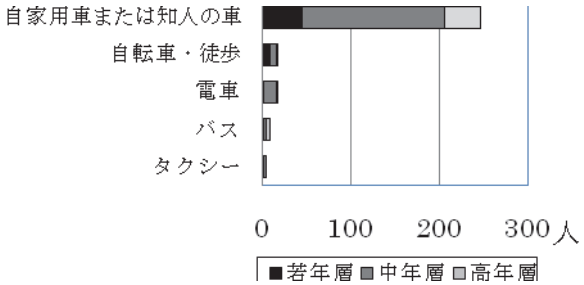


図２　年齢別にみた科学館への交通手段

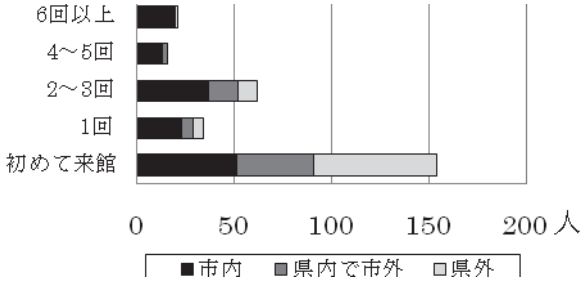


図３　在住地別にみた過去３年間の来館回数

A Study on the Visitors' Conditions and the Characteristic of Viewing Behavior at the Science Museum
-A Case Study of the Hachinohe City Marine Science Museum-　　*ISHIKAWA* Hiroyuki

２．来館者の属性および要望

２．１　科学館における来館者の属性

表１はアンケート調査における回答者の属性であるが、年齢層別に見ると中年層が最も多く約６割を占め、次に若年層と高年層が各々約２割であった。また在住地別にみると八戸市内が半分を占めている。なお、来館者の属性については、時期的な変動や調査時に回答しなかった人もいるので､そのことを前提条件に考察を行っていく。

図１から科学館における利用圏域を見ると、八戸市内（中央地域・東地域・西地域・南地域・北地域）の来館者が半数で、市外・県外が半分を占める。年齢層別で見ると十和田市と八戸市（東地域）を除いてどの地域も中年層が多く占めている。また、図２から科学館への交通手段を見るとほとんどの人々が車で来ている。科学館までの交通手段が少なく公共交通のアクセスの悪さが影響していると思われる。

図３から科学館における過去３年間の来館回数をみると、初めての来館者が最も多い。4～５回以上の来館者は全体の約 13%で、リピーターが少ないと考えられる。さらに「初めて来館」を見ると、市外や県外の来館者が多い。１回以上を見ると八戸市内の来館者の占める割合が大きくなる傾向にある。このことからリピーターを増やすためには初めて来館した市外・県外からの来館者に再び来たいと思わせられる科学館づくりが求められる。

２．２　科学館における来館者の要望

図４から在住地別による来館にあたっての要望についてみると「市の広報や新聞、テレビなどで常設展示の宣伝をしてほしい」が最も多く、市内からの来館者の占める割合が大きい。次に「科学館へ誘導のための案内標識を増やしてほしい」も多く、市外・県外からの来館者の占める割合が大きい。これらのことから市外・県外の来館者は初めて訪れる場合も多いので科学館へアクセスするための情報を求めており、市内の来館者は催し物について多様な情報を望んでおり、在住地の違いにより提供してほしい情報内容が異なる。

図５から科学館に期待する教育活動について見ると「講座や体験教室、観察会などのイベントの実施」が最も多く、次に「企画展の回数を増やす」で催し物の内容や開催数についての要望が多い。さらに年齢層別で見ると若年層では「講座や体験教室、観察会などのイベントの実施」、高齢層では「展示解説者を設ける」の占める割合が大きいことから、高齢者は強い学習意欲を持ち、若年層は楽しみながら理解を深めようとすると考えられる。

図６から魅力ある科学館に必要なことを見ると、「貴重な展示物の観覧ができる」が最も多く、次に「展示物の量が充実している」で、展示物の質と量に関する回答が多い。さらに在住地別で見ると県外では「貴重な展示物の観覧ができる」の占める割合が大きいことから八戸でしか見られない展示物を観覧したいと思われる。

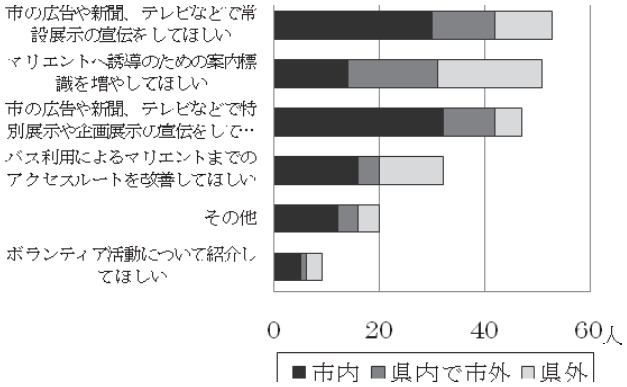


図４　在住地別にみた来館にあたっての要望

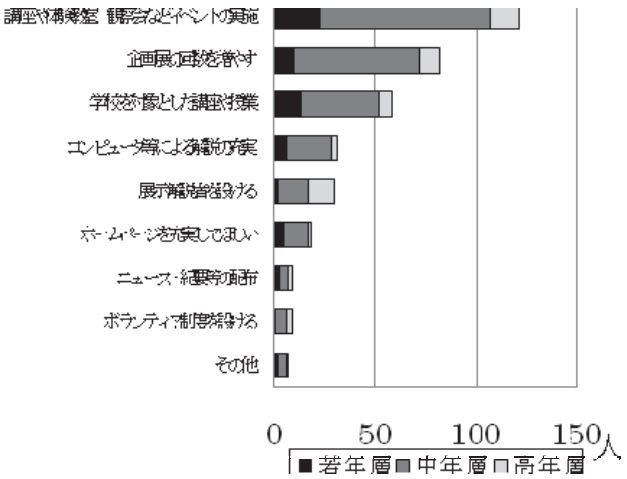


図５　年齢層別にみた期待する教育活動

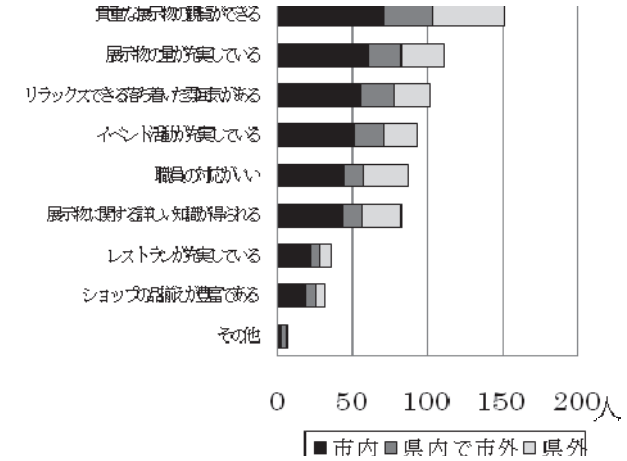


図6　在住地別にみた魅力ある科学館に必要なこと

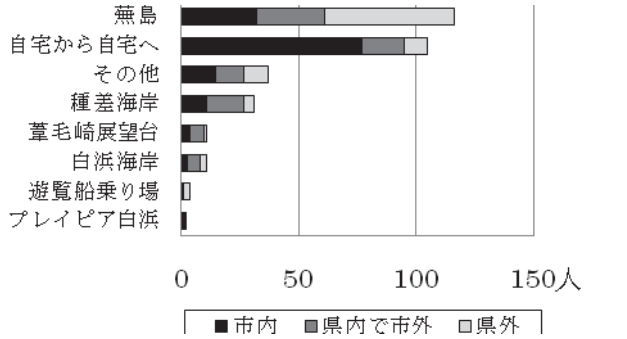


図７　在住地別にみた立ち寄り状況

２．３　来館者の立ち寄り状況

図７から立ち寄り状況を見ると、近隣の蕪島（国指定天然記念物ウミネコの繁殖地）に立ち寄る来館者が最も多く、次に「自宅から、自宅へ」が多く、どこにも立ち寄っていない。さらに在住地別にみると「蕪島」では県外が多く、「自宅から、自宅へ」では市内が多い。

これらのことから県外からの来館者は観光のついでに立ち寄り、市内の利用者は科学館だけを目的としていると考えられる。

３．来館者の観覧行動

３．１　展示内容別の立ち止まり観覧行動

表２は３階展示室内（図８）における追跡調査の被調査者の属性であるが、年齢層別にみると中年層が最も多く約６割を占め、次に高年層が約３割、若年層が約１割であった。また性別にみると男性が６割を占めている。なお、来館者の属性には時期的な変動があるので、そのことを前提条件に考察を行っていく。

図９から展示内容別の平均立ち止まり時間をみると、来館者の平均立ち止まり時間は展示内容によって大きく違い、来館者の多くは探査船「ちきゅう」の展示に長く立ち止まっており、特に高齢層の立ち止まり時間が長い。このことから多くの高齢層は、改装された探査船「ちきゅう」の展示を観覧する目的で来館していると考えられる。

３．２　展示手法別の立ち止まり観覧行動

本研究では、展示を「静止展示」「動態展示」「参加型展示」の３つに分類した。図 10 から展示手法別に平均立ち止まり時間をみると、参加型展示の平均立ち止まり時間は長く、特に同伴者のない利用者や、子供や孫と一緒の来館者が長い。また同伴者のない来館者は、静止展示についても長時間観覧していることがわかる。これらのことから、子供や孫と一緒の来館者は参加型展示のような子供や孫と一緒に楽しむことのできる娯楽性の高い展示に大きな魅力を感じていると考えられる。逆に同伴者のいない来館者は、静止展示についても長時間観覧していることから自らが進んで学ぶような展示に関心がある

表２　追跡調査の被調査者の属性（単位：人）

	若年層 (29 歳以下)	中年層 (30～59 歳)	高年層 (60 歳以上)	合計	割合
子供や孫	3	31	7	41	67%
友人、知人	5	4	5	14	23%
同伴者なし	0	2	4	6	10%
合計	8	37	16	61	100%
割合	13%	61%	26%	100%	

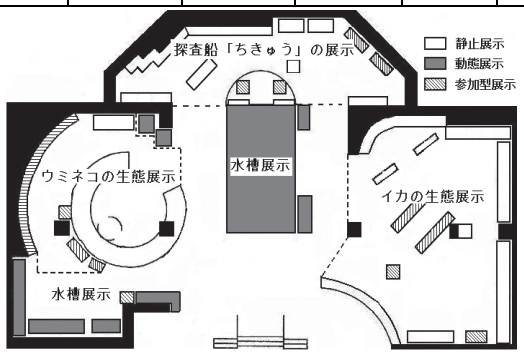


図８　八戸市水産科学館３階平面図

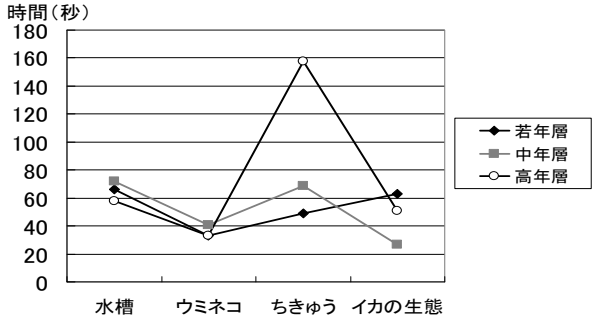


図９　展示内容別にみた平均立ち止まり時間

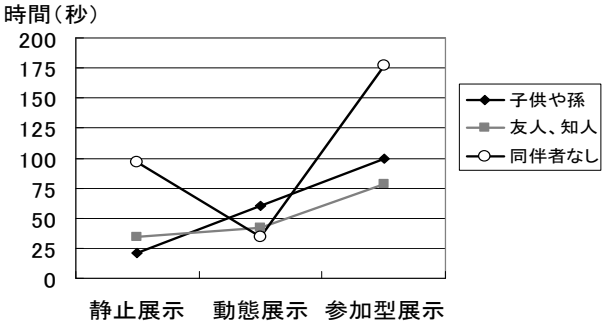
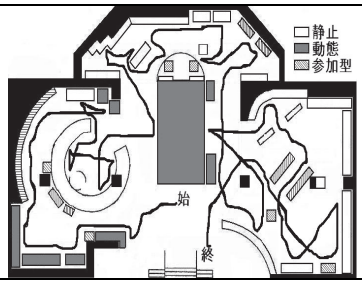
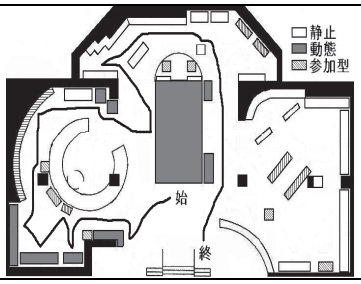
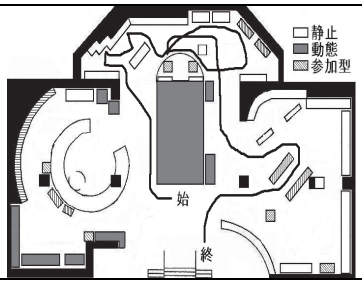


図 10　展示手法別にみた平均立ち止まり時間

表３　観覧動線別にみた立ち止まり行動

	入念観覧型(27 人、44%)	通過観覧 A 型(10 人、16%)	通過観覧 B 型(10 人、16%)
動線と展示手法			
総立ち止まり時間	30 分 9 秒	19 分 13 秒	19 分 11 秒
滞留時間	38 分 42 秒	25 分 27 秒	23 分 34 秒
立ち止まり回数	18.6 回	13.7 回	11.2 回

と思われる。

３．３　歩行観覧行動

本研究では、観覧動線を入念観覧型（ほぼすべての展示に対し観覧動線が及んでいる）、通過観覧Ａ型（イカの生態展示を除いた展示には観覧動線が及んでいる）、通過観覧Ｂ型（探査船「ちきゅう」の展示に対しては入念な観覧動線がみられるが、他の展示の多くを飛ばしている）、その他の４つに分類した。表３から観覧動線別の立ち止まり行動をみると、入念観覧型の来館者は、他の型に比べ、総立ち止まり時間(4)、滞留時間、立ち止まり回数すべてが最も多い。しかし通過観覧型の者でも、参加型展示には興味を示し観覧しており、それにともない総立ち止まり時間や立ち止まり回数も増えていることから、参加型展示を配置することは、通過観覧型の来館者に対して効果的であると考えられる。

４．まとめ

４．１　来館者の要望及び立ち寄り状況

これまでに八戸市水産科学館の来館者の属性や要望・立ち寄り状況を捉えて３つのことが指摘できた。

①公共交通のアクセスの悪さが影響していて、ほとんどの来館者が車を用いている。リピーターに市外や県外の来館者が少ないことから、いかに初めての来館者を満足させられる魅力的な科学館づくりが求められる。

②来館者は展示物の質と量の充実を望んでおり、特に市外や県外の来館者は貴重な展示物の観覧を望んでいる。

③市外や県外の来館者は、近隣の観光地にも立ち寄っていることから、観光資源を巡るツアー等と結びつけられれば、より頻繁に科学館へ足を運ぶと考えられる。

４．２　来館者の観覧行動の特性

次に来館者の観覧行動と展示手法との関係を考察し、以下の３つのことが指摘できた。

①来館者の観覧行動は、展示内容によって大きく違い、特に高齢層の多くは、改装された新規の展示を観覧する目的の人が多かった。

②参加型展示は長時間観覧されている。特に子供や孫と一緒の来館者は子供や孫と一緒に楽しむことのできる娯楽性の高い参加型展示に大きな魅力を感じている。また同伴者のいない来館者は、静止展示についても長時間観覧しており、自らが進んで学ぶような展示に関心があると考えられる。

③来館者の観覧動線をみると、入念観覧型の来館者は、他の型に比べ、総立ち止まり時間、滞留時間、立ち止まり回数すべてが最も多い。しかし通過観覧型の者でも、参加型展示には興味を示し、それに伴い総立ち止まり時間や立ち止まり回数も増えている。これらのことから参加型展示を配置することは、通過観覧型の来館者に対して効果的であると考えられる。

以上のことから八戸市水産科学館にリピーターを増やすための条件として、公共交通のアクセスルートを改善することや、館内の展示物の質と量を充実させ、さらに周辺にある観光資源とネットワークを図ることがあげられる。また効果的な展示計画は、来館者の興味関心の高い参加型展示をより多く配置することと考えられる。今後の研究課題として、繰り返し調査を行い、リピーターの属性や観覧行動と来館回数との関係を捉えて一般化することがあげられる。

謝辞　本研究をまとめるにあたり元八戸工業大学卒業研修生である吉田啓二君と藤巻拓也君に担うところが大きい。ここに記して感謝の意を表する。

補註

(1) 1989 年に開館した八戸市水産科学館（通称マリエント）は、青森県八戸市の北東部（東地域）の海岸沿いに立地し、延床面積 2,618 ㎡の鉄筋コンクリート造である。その３階には、近海で捕れる魚類や天然記念物ウミネコなどの生態を体験しながら学べる有料常設展示室が設けられ、大人 300 円、子供 100 円となっている。４階にはミュージアムショップと、地元で水揚げされた新鮮な魚介類をメニューにしているレストランがある。５階には八戸港を一望できる無料の展望室がある。2006 年からは指定管理者（NPO 法人海の八戸）により運営されている。

(2) アンケートの質問は、①来館について②教育活動・サービスについて③施設面について④魅力ある科学館像についてから成る４項目である。調査期間の入館者数は716 人で、その内回答者は 287 人（回収率 40%）あった。

(3) 展示内容は、水槽展示、ウミネコの生態展示、探査船「ちきゅう」展示、イカの生態展示の４つに分かれている。また探査船「ちきゅう」の展示は、2007 年 12 月 1 日に改装された。

(4) 総立ち止まり時間は各展示の立ち止まり時間の和である。

参考・引用文献

１）倉田公裕・矢島國雄『新編博物館学』東京堂出版, 1997, p36.
２）野村東太・柳沢良一：博物館における諸活動・利用の特性とこれに即した総合的な類型化の試み－博物館に関する建築計画的研究Ⅲ－，日本建築学会計画系論文集　第 369 号 1986 年 11 月　pp38～46
３）野村東太・大原一興・朴光範・小川英彦・真銅博司・西宮浩司：博物館の展示・解説が来館者に与える影響－博物館に関する建築計画的研究Ⅴ－，日本建築学会計画系論文集 第 445 号　1993 年 3 月　pp73～81
４）石川宏之：地域博物館における来館者の利用状況と意向に関する研究　八戸市博物館を事例として, 日本建築学会、神奈川大学、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1、2006 年 9 月, pp. 425-42
５）石川宏之：地域博物館における来館者の利用状況と意向に関する研究　八戸市美術館を事例として，日本建築学会、福岡大学、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1、2007 年 8 月 pp. 123-124

*1 八戸工業大学工学部建築工学科講師・博士(工学)　Lecturer, Dept.of Architectural Engineering, Faculty of Engineering, Hachinohe Institute of Technology, Dr. Eng